

令和七年二月吉日初版作成

奥の奥の「私たち」になる

高嶋善三郎

目次

- 奥の奥の「私たち」になる・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 現われの自分はいくつもある・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 本当の自分にも奥の奥がある・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 神様の方へ想いを向ける大切さ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 新しい波動の巡ってくるのを邪魔するもの・・・・・・・・・・ 7
- 神々のあらゆる光が総合して生きている私たち・・・・・・ 8

お願い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

（スマホ）090-3346-6619

（メールアドレス）zensan@peach.ocn.ne.jp

奥の奥の「私たち」

ついでに、お話をさせていただきます。

「はい、ただひそかなら」

この歌は、五井先生が消えてゆく姿で世界平和の祈りを続けられ、到達できる心境を示してくださいったものと思いますが、このような心境に至るにはどのような点に留意するべきかについて五井先生はどのように説明されていますか。あれば、教えてください。

この質問に対して、参考になる五井先生のお言葉があります。それは、『白光誌』1964年2月号「人間の深さ、広さは限りない」に掲載された、経営コンサルタントとして現役で活躍されている法友の横井英昭さんのブログで最近紹介されているものを引用させていただきます。

『人間神の子への道』において、真実の自己と現れの自己を区別することの大切さを言及していますが、この両者の違いは、宇宙神の分身というべき、光そのものの私たちの意識を、現れの自己（概念）

に置くか、自分の奥の奥にある真実の自己（本心）に置くかの違いだと解説されています。

では、掲載内容をみてみましょう。

「質問（一見、悪に見えることも）単に悪そのものではなく（それを浄めるために現れたものと考えてよいのですか」という問いに対して次のようにお答えになっています。

「自分というものをどこにおくか。現われているほうに自分を置くか、奥のほうに自分を置くかその違いです。例えば二十段階あるとすれば、二段階目においている人もあれば、二十段階目においている人もある。もっと奥があるのですが、どこに自分を置いているか、それだけの話です。思ったところが自分なのです。だから無為にしてなせば、奥の、奥のどこまでもいけるわけです。それを大概自分という、一人いるような気がするのですよね。同じ。」

自分というのは一人だなんてこともない話です。一人じゃなく、神々のあらゆる光が総合して生きています。あらゆる単の光が混ざり合ってきているのです。例えば七色の光なら光が混ざりあって来ています。七色の光の色一色一色は神霊ですから、神霊の光が伝わっています。

伝わっているという事はここに居るという事と同じです。それを一人だと思っている。一人じゃないです。だから私は大概お話をしているとき「私たち」といつているでしょう。私はというのはあまり使わない。

私という一人はいないですよ。体から言えば私だけけど、働きとしてはすべて「私たち」なんです。私」なんていう個人はいないんです。個人があるという人はまだ悟っていない。判っていない。なんの誰某(なにがし)という人がここにいて、それがやっていたなって思うけどね。私たちがうんと集まって大きな「私たち」になる。そうすると気が楽だし、カもつくし勇氣も出る。だからつまらない「私」たちにならないで、奥の奥の「私たち」にならないといけませんね。」

現われの自分はさういふもの

(質問) 自分ではスーッとしているようで気持ちの時とさうじゃない時、その程度しかわからないのですが、消えてゆく姿と世界平和の祈りをやわらわして、消えてゆく姿の想いの座というのが仮定されるのですが。

「先生(せんせい)そこが必ずかかっているね。悪い自分はどこかへ行ってちゃっ

て、悪いなあ、と思うときの自分はどこに居るんだろう、と思うでしょうね。そのところが面白い。自分というものがいくつにもいくつにも分かれているんです。奥の自分と表面の自分と中ほどの自分と、時計の振り子のように動くでしょう。振り幅の範囲があるわけですよ。その範囲の中に記録されているものがたくさんある。それがヒョッ、ヒョッと思いうんですね。

その揺れ動く幅を10に分ければ、9のところでもなければ5のところでもなければ、1のところでもない。現われの自分は、振り子のように年中動いているから、道のようなものが、波がついているわけです。そうすると1の点の自分が思ったり、3の自分、5の自分、6の自分、8の自分が思ってみたりするわけです。だから想いの現れの世界の自分というものは幾つもあるんだ、という事です。

本当の自分は一つ。奥にある。その自分というのは神我一体の自分です。その奥をいけば、宇宙神になっちゃう。宇宙神を田とすればその中に自分がある。その自分だけが本当の自分なんで、後の自分は現れた影絵に過ぎない。悟らうが、悟るまいがそんなものは影絵に過ぎない。」

本当の自分にも奥の奥がある

「先生）だんだんやっていくと、奥の自分に知らないうちになってきます。はじめは表面の自分で思う。次にはそれより奥、又それより奥で思う、その奥より更に一歩奥で思うようになってくる。しまいには何も思わないでそのままスースーと行えるようになってくる」。

(質問) 例えば統一会などで、口笛をスーときいていると、何か思っているようにいながら、非常に落ち着いていた感じがするんです。

「かなりの奥へ行っているんですね。統一している自分とか、これから統一するとか、これから悟るとかそんなもんじゃない。そう思っている自分もまだ奥の自分じゃない。駄目かな、と思う自分はそう思わない人よりこれはズッと上なんです。しまいになるとそのまま、例えば雑念が出てても、遠くの遠くの遠くの遠くまでいなくなるそのまま、例えば雑念が出てても、遠くの遠くの遠くの遠くのでかすかに流れ去ってしまうようになりませう」。

「私ははじいじになってくるかじいじになってくる。じいじになってくる」

もじいじ、心配もしてみなくて、喜ぶて悲しむて、いらぬすんでじいじ。先生はあんなことをいっているけど、本当に思わないのかしら、と思うでしようけど、何も思わない。そんなところが判のていじいじ。霊的に見なきゃ判らないでしようね。

皆さんはこの自分で自分を見つめているか、という反省は必要でしようね。まだこんな自分で見つめているのか、と思ったらそれは消えてゆく姿にしておけばいい。一寸はましになった、少し悟ったなと思った時、誰でもそう思いますよ。その時、これも消えてゆく姿だな、思った時、また一阶段、奥へ行くのです。

人に何も思わないで善いことをした。嬉しいな、と嬉しがってもいいんです。ああ私も立派になった、嬉しいな、しかしこれもまた(消えてゆく姿)、と思った時もう上へいきますよ。一寸はましになった、そこに止まっていたは駄目なのです。汚れちゃいますからね。

それから大事なことは、人に真理のことをお話しする場合でも、真理の言葉として「愛するんじいじが一番いいんです」や「と教わって、それを憶えて、その真理をそのままいったって光がありません」。

自分の中に溜まっている意識で言っている場合、古い宇宙子(存在大元、最小単位)になって汚れているんです。その汚れたな、中から湧いて

きて自分の言葉として出てくる場合には光ってくるんです。本当に思っているからから溢れ出てくるから相手を打つんですよ。たとえ言葉の使い方が間違っていてても中味が伝わっていくのですよ。いへる言葉が折の目正しくても、中味が一つも伝わらない場合もあるですよ。

それは知識になって溜まったもので言うから、いへるうまいことをいっても相手を打たない。拙くても、奥から湧き出てくるから相手を打つ。だから教養のないおはさんの云った言葉でも胸を打つ場合もあるし、学者の言葉でも胸を打たない場合もある。

中から湧き出てくる、というがそれはどこから湧き出てくるか、奥の奥が一番深い奥から湧き出てくればしめたものです。そうでなくとも中から出てくればいいですよ。中から出てくるというのは空から出てくるのです。中からといっても幅があって、空の、空のまた空のという所があるんですよ。成りたての空の中から出てくるのか、どこまで行った空から出てくるか、空の奥処におくど（くのみ心のまみ、出てくるかね。「

以上のお言葉の中で、神我一体になった、真実の自分においても、その奥があり、それが宇宙神だと言われています。

■頭境れの自分と真実の自分の違いについて、言及したところですが、

私たちは、私たちの意識を置いた自分で自分を見ている。例えば現われた不安恐怖の想念に意識を置く、その想念行為を体験している自分から自分を見ている。また悟った意識に自分を置くと、悟りを体験している自分から自分を見ている。そして「これも消えてゆく姿だな」とその自分を放手すと、一段階奥の自分に進化してゆくと言われるのです。それゆえ、私たちの魂の進化のためには、常にどの自分で自分を見つめているか、を反省し、消えてゆく姿で世界平和の祈りをしていくことが大切だと言われているのです。

神様の方へ想いを向ける大切さ

現在私たちが神聖復活をしようとしているのは、宇宙神の分身たる私たちが、愛と調和の世界をこの未開の地球世界に現わそうとして降りてきたときに失った直観力を取り戻すためのものなのです。

人間が何故それらの力を失い、肉体人間そのものになり下がったのかといえば、霊・魂・魄として三界に活動しているうちに、肉体外の六官（直感）直覚（神智）の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼るところが習慣づけられ、五官に触れぬものは無いものと思ってしまうようになり、人

間とは肉体であり、心（精神）とは、肉体の器官が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられぬようになっていったからであると言われています。

神様の方に想いを向けて置く生活がいかに大事かということは、宇宙子科学的に説明されています。

「この世はすべて波動で成り立っているので、精神波動と物質波動の調和によってこの世は完成してゆく。精神波動にしても物質波動にしても、常に新陳代謝しているのです、古い波動を把えつつけていては、新しい波動の巡ってくるのを邪魔してしまうことになる。その新しい波動というのは、宇宙神の心から生まれてくるのである。

その最初の波動を出すところを、宇宙子科学では宇宙核といい、その波動の最小単位を宇宙子と呼んでいる。

精神波動にしても物質波動にしても、古くなると、活れてきて、本来の働きができなくなる。それは、細胞が古くなるから、老衰現象が起こる。地球科学の細胞の説明と全く同じで、精神波動でも宇宙核の中から絶えず、宇宙子の補給を受けていないと、精神波動が汚れてきて、理非判断ができなくなる。そして人類への迷惑にも気づかず、原水爆実験を

つづけてゆくようなことになってゆく。

理性が曇るのも、直感が鈍るのも、すべて、宇宙子波動の新陳代謝がうまくできていないからである。そこで、常にその新陳代謝をうまくやるように、人間の想念はいつでも宇宙核（神様）の方に向けておくことが大事なのである。」「白光誌1963年5月号』

新しい波動の巡ってくるのを邪魔するもの

新しい波動の巡ってくるのを邪魔してしまう古い波動を把えつつけている想念行為は、どういふものなのでしょう。

そのヒントになる言葉が、『コンネスの書写真 私は聖ジャーメインなるものである』111ページ（アシェイマリ・マクナマラ著）においても次のように解説されています。ここでは、本心を内側の静寂、あるいは内なる源と言い換えられ、邪魔する想念行為を二つ指摘し、その解決へのヒントが示されています。その要点を整理します。

第一に肉体の心は、目の前の混乱に出会うと、瞬時に情報を取り込んで、それを理解しようとして細かく分析し、苦痛を生み出すものを探し求め、そしてさらなる問題という新天地にあなたを連れていき、それらの問題

をさらに理解しようと捜し求めつつけてしまう。

第二に、自分に接している人たちの、自分に対する個人的見解に把われ、それに振り回される。幼児は、人にどう思われようと気にしない。自分のことを人に認めてもらう必要もない。しかし大人になったあなたは、(なんの防御もしないため)他人の個人的見解(分別心―肉体の心)に基づいた、あなたへの観方を無意識のうちに受け入れてしまう。しかしそれは、他人の見解にエネルギーを与えたことになり、その観方に把われ、何かにつけ自他を責め、裁いてしまう。あなた方の多くの人はいまだに夫あるいは妻、友人、マスメディア、周りの人たちの、自分に対する個人的見解を受け入れ、自分自身の心を、善悪や美醜など相對の、三次元世界の檻の中に閉じ込めている。

そして、これらの想念行為を手放す方法とこれによって得られる結果について、その原因を示し、次のように解説されています。

このようになったのは、肉体の心の働きであるが、そのもとは、すべて内側の静寂(本心)からくるエネルギーであり、エネルギーはあなたの選択と注目に従って意のままに動くことを忘れてしまっているからだ。この真理を理解し、世界中のガイドや導師のサポートを得て、他人の自分に対する意見を手放し、内なる源(本心)にあなたを導かせる時、

あなたの内なる源の波動があなたの外に現れ、あなたの周りのエネルギーは驚くほどシフトする。

人生は美り多いものとなり、必要なすべてのことが、たやすさと流れと恩寵と共に現われてくる。

五井先生流に言えば、真実の自分(生命の本源の世界につながっている自分―本心)を知り自覚し、現れの自分(肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分―肉体の心)と区別して、真実の自分(本心―内なる神様)の方に想いを向けてゆけば、真実の自分に自分を導かせる。即ち神にすべてを全託することになります。誤てる想念(カルマ)は、すべて光の中に消えてゆき、人生は驚くほど愛に包まれ、己自身、これまで発揮できなかった能力や素質が自然と現われ、喜びと愛に包まれた人生となって来る。そして自分の選択と注目に従って意のままに即ち自由自在に動いていた時代の自分を思い出し、この肉体界に身を置きながら、己の神聖を顕現するということとなります。

神々のあらゆる光が総合して生きている私たち

今回の五井先生のお言葉の中に、「自分というのは、一人じゃなく、神々のあらゆる光が総合して生きている」という表現がありますが、どういふ状態を言及されているのでしょうか。それを理解するのに、ヒントになるお言葉が『白光への道』と『真の幸福』に説明されています。

「神は大生命であり、大霊である。この大霊が、七つの霊に働きを分けて、いわゆる職能というか、働きの特色というか、使命というか、ともあれ、七つの色に分かれた。これを七つの直霊という。この七つの直霊が各自のいのちを働かし、互いに交流し合い助け合って、この人類世界に、やがて神の世界を完成しようとしている。

この七つの直霊から、分霊が生まれ、その分霊から又分霊が生まれているが、その分霊たちは、いずれも、七つの直霊の、いずれかの特色を強くもち、後の六つの要素は、その特色の裏面で、この特色を助けて働いているわけで、各分霊がそうした一つの特色と、六つの補助的働きをもって活躍している。

例えば、紫の働きをもつ直霊から生みなされた、紫の特色をもつ分霊は輪廻転生を繰り返しながら進化向上の道をたどっていくその過程において、本来の特色である紫の本質的働きは変わらないが、その特色は内に隠されて、今生においては補助的働きの一つである青の要素を強

く表に現わしているかもしれない。しかし人間は自分の特色の他の六つの要素の働きを、その時その時に体験としてマスターしながら、本来の特色を深めつつ、人間的にも調和完成された姿となって直霊に帰一していく道をたどっていく。」と。

また『真の幸福』においては、「人間各個人は、神の分け生命として、大宇宙のあらゆる立場を経験として知り、次々と神の中心の立場に近づいてゆくのだという偉大さは、その事実を想うだけで、心が広々としてくるのである。只単に、この地球界の物質世界における幸、不幸だけに把われて一喜一憂していることは馬鹿らしいことで、じっと心を静めて、大神様のみ心の中をみつめてみる必要がある。そのみつめる方法がいのりなのである。」と解説されています。

これらの言葉を実感として受け止められるようになった時、私たちは人間神の子観の真髓を体得したということになるのでしょうか。

冒頭の五井先生の歌で、「己は澄みて」という箇所がありますが、私たちの意識は、今どの自分に置いているのでしょうか。消えてゆく姿で世界平和の祈りや神聖復活の印などをとおし、奥の奥にある自分をめざして、精進していきたいものです。